

2023年2月19日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 139 : 8

マタイによる福音書 27 : 45～46

「最も激しい試みの時にも」

(ハイデルベルク信仰問答 問 43～44) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】 【招詞】 詩編 33 : 1～5

【祈祷】

【聖書】 詩編 139 : 8、マタイによる福音書 27 : 45～46

【説教】 「最も激しい試みの時にも」

<十字架上でのキリストの死からの益>

主の日の礼拝では、毎週、ハイデルベルク信仰問答から聖書の御言葉を聞いています。先週は宮崎中部教会の創立記念礼拝でしたので、少し信仰問答から離れましたが、今日はまた戻りまして、問 43～44 を見ていきたいと思えます。

先々週は、「使徒信条」の「死にて葬られ」の部分で、イエスさまの十字架の死の意味と、わたしたちの死について、語られていました。

イエスさまの十字架の死は、わたしたちの罪を身代わりに背負って、神さまの裁きを引き受けて下さるための死でした。それは、単なる肉体の死ではありません。肉体の死と共に、神さまとの関係を断たれる、罪人の死。神さまに呪われた者の、本当の死。その死を、イエスさまは十字架で死なれたのです。

それゆえにわたしたちは、このイエスさまの救いを信じて、十字架の死に与り、罪を贖っていただくなら、もはや地上の命を終えても、神さまとの関係を断たれることはありません。

イエスさまが、わたしたちの罪の裁きをすべて引き受けて下さったゆえに、わたしたちの地上の死は、もはや眠りにつくようなものであり、もはや「永遠の命への入口」(問 42) なのだ、と言われています。

つまり、イエスさまに結ばれたわたしたちは、罪を赦され、神の子とされて、神さまと共に生き、神さまにあって死に、神さまによってよみがえらされる、ということなのです。

罪を赦されたわたしたちは、イエスさまの救いを信じ、洗礼を受けてこの方と結ばれた時から、イエスさまのものとされて、生きるにも死ぬにも、神さまとしっかり結びついているのです。それが、前回のところで語られていたことでした。

今日はそこから、さらにこう問うています。「問 43 十字架上でのキリストの犠牲と死から、わたしたちはさらにどのような益を受けますか。」

つまり、イエスさまが十字架で死んで下さって、わたしたちが受ける恵みは、死ぬときだけのものですか？ さらに、何か恵みがありますか？ という問いです。

ハイデルベルク信仰問答は、もちろん、あると答えています。その答えを見てみましょう。

<新しく生きる>

問 43 の答「この方の御力によって、わたしたちの古い自分がこの方と共に十字架につけられ、死んで、葬られる、ということです。それによって、肉の邪悪な欲望がもはやわたしたちを支配することなく、かえってわたしたちは自分自身を感謝のいけにえとして、この方に献げるようになるのです。」

ハイデルベルク信仰問答は、イエスさまの十字架によって、古い自分もその十字架と一緒につけられて、死んで葬られるのだ、と語ります。

この根拠となる聖書の箇所は、ローマの信徒への手紙 6 章で、そこは洗礼の恵みを語っている部分です。わたしたちが洗礼を受けて、イエスさまと一つに結ばれた時。古い自分、つまり、罪に支配されていた自分が、イエスさまの十字架と共に死ぬのです。

わたしの罪を贖って下さったイエスさまと共にあるなら、神に背く自分、罪人の自分、罪と死に捕らわれ、それらに支配されていた自分は、もうそこにはいないのです。そこでは、イエスさまに結ばれた、新しい自分。神さまと共に生きる自分。神の子とされた自分。神さまの恵みに捕らわれ、支配されている自分とされるのです。

そのゆえに、「肉の邪悪な欲望が、もはやわたしたちを支配することはない」、と言います。肉の邪悪な欲望とは、人間の思いで、神さまに逆らおうとする欲望、自分が神になろうとする欲望のことです。そのような欲望から、わたしは解放されるのだと。

…でも、それは本当でしょうか。わたしたちは洗礼を受け、イエスさまと結ばれても、それでも罪に誘われることがある。神さまを疑ってしまうことがある。隣人を愛さず、傷つけてしまうことがある。ほとんど、どうしようもない自分の弱さが、嫌になってしまうことがあるのではないのでしょうか。

恵みをいただいているながら、わたしたちは、まるで罪に捕らえられたままであるかのような、そんな現実を生きているのではないのでしょうか。

…しかし、だからこそ。わたしたちには、イエスさまに捕らえられているということ。自分が、罪のものではなく、イエスさまのものである、という確かな確信が必要なのです。

この見たままの現実の通りに、罪に支配されているのなら、それはもうわたしにはどうしようもなく、無力感と絶望を覚えるしかありません。

しかし、このような現実でも、それでもなお、確かに成し遂げられたイエスさまの十字架によって、この罪は赦され、その支配から解放されている。わたしに、神の子として生きる道が拓かれている。赦しの宣言の中で、この罪を振り払って、神さまに向かう道が備えられている。わたしたちは、そう信じてよいのです。いや、むしろそのことこそが、罪の中にいるわたしたちが向かうべき目印であり、拠り所であり、希望なのです。

この罪に捕らわれているような現実の中にあっても、イエスさまの十字架の死が、確かにその只中に立てられた、という真実がある。わたしたちの罪に満ちた現実にもまして、わたしたちがイエスさまのものとされている、その確かな現実がある。

そこにこそ、わたしたちが起き上がり、立ち帰り、また新しく歩み出すための、根拠と希望があるのです。

わたしたちは、罪に捕らわれている者ではなく、そこから解放されて、キリストに捕らわれたのです。もはや、罪のものではなく、キリストのものとされているのです。それこそが、まことの現実なのです。

そうであるならば、わたしたちの生きる目的は、わたしたちの歩むべき道は、この方に方向づけられます。

わたしたちの生きる目的は、何か人と競争して勝つことや、成功することや、多くを手に入れることではありません。何かを成し遂げることや、名を遺すことや、優秀であることが、人生の意味なのではありません。

そもそもわたしたちは、そのまま、罪人であったときから、神さまにとって御子の命を惜しまず与えるほどに、大切な、意味がある存在なのです。

ですから、救われたわたしたちは、その神さまのものとして、神さまの子どもとして、喜んで、ここに存在して、生きる。イエスさまが十字架の死によって救って下さった恵みに立ち、神さまを礼拝し、賛美する。キリスト者として、この世の中に立つ。それこそが、イエスさまの十字架の死に与って、新しく生まれた、わたしたちの生き方なのです。

それが、今日の答えで、「わたしたちは自分自身を感謝のいけにえとして、この方に献げようになるのです」ということです。

それが、古い罪の自分を十字架で葬っていただいたわたしたちの、新しい生き方なのです。

<陰府にくだり>

さて、そのことが示されたうえで、ハイデルベルク信仰問答は、「使徒信条」の次の言葉「陰府にくだり」の言葉について語ろうとします。

それは、この「陰府にくだり」という言葉を、ハイデルベルクは、わたしたちがイエスさまの十字架に与って生きるための慰めの言葉として、受け止めているからです。

問 44 を見てみましょう。「問 44 なぜ『陰府にくだり』と続くのですか」。

「陰府にくだり」については、教派によって解釈が色々と異なっています。

まず「陰府」というのが、旧約聖書の父祖たちがいるところであるとか、義人の魂が留まっているところとか、サタンがいるところであるとか、色々な考えがあるのです。

ハイデルベルク信仰問答は、わたしたちの改革派の伝統に立つ信仰問答ですが、この「陰府」を、死んだ人の「場所」であるとか、魂が行く「場所」とは考えませんでした。

改革派では、「陰府にくだり」とは、どこかの場所へ行った、というのではなく、イエスさまのへりくだりを現わすと考えられてきたのです。

それはつまり、「陰府」という言葉は、イエスさまがその御生涯と、とりわけ十字架において味わわれた、苦しみの深さ、その激烈さを現わす言葉である、と考えたのです。

イエスさまが死なれた十字架の死は、わたしたち罪人が死ぬべき死でした。

それは、神さまに背いた罪人が、裁きを受けて、神さまに呪われて死ぬ死。神さまに見放され、関係を断ち切られ、一切の望みを失って滅びていく死です。

その、地獄のような不安と痛み。言い難い不安と苦痛と恐れ。そこまでの、深い深い絶望の底に、イエスさまが降られた。

それが、「陰府にくだり」という言葉で言い表されている、と理解したのです。

これまで、「使徒信条」では、イエスさまが「十字架につけられ、死にて葬られ」ということが告白されてきました。でもこれは言葉だけだと、死んで、葬られた、という事実を述べているだけ、とも言えます。

しかし、その十字架の死が、どれほどの痛みだったか、どれほどの苦痛で、どれほどの不安と恐れに苛まれるものだったか。

それが「陰府にくだり」という言葉で言い表されているのです。

<地獄のような不安と痛みから>

そのようにして、イエスさまが「陰府にくだ」られたのは、他でもない、わたしたちのためでした。問44の答えです。

「答 それは、わたしが最も激しい試みの時にも、次のように確信するためです。すなわち、わたしの主キリストは、十字架の上とそこに至るまで、御自身もまたその魂において忍ばれてきた言い難い不安と苦痛と恐れとによって、地獄のような不安と痛みからわたしを解放してくださったのだ、と。」

わたしたちには人生の中で、「最も激しい試みの時」と思われる時があるでしょう。

そのような時、世の中の言葉では、「神も仏もない」と言ったりします。また「まるで地獄のようだ、生き地獄だ」と表現することがあります。今日のハイデルベルクでも、「地獄のような不安と痛み」と表現されていました。

体の痛みであっても。心の痛みであっても。人間関係の悩みであっても。生活することの困難であっても。地獄としか言いようのない、そんな最も激しい試みの時を、わたしたちは経験することがあります。

ある人は、「地獄」とは、「神から引き離された状態のことだ」と言っていました。神なき世界。そうであるなら、「地獄」は、一片の救いもない、一筋の希望もない、絶望の中に置かれた、悲惨な世界ということです。

しかし、そのような中で、わたしたちは、イエスさまにあって、もはや「地獄」を味わうことはない。神から引き離される痛みは、もう決して味わうことはないのです。

なぜなら、神から引き離されるその苦しみは、神の御子イエスさまがああ十字架の苦しみと死で、すべて引き受けて下さったからです。イエスさまが、「陰府にくだ」って下さったからです。

わたしたちが、ここに神さまはおられない。救いがない。希望がない。そう叫びたくなるような時。実はその叫びを、すべて先取り、すべて引き取り、神の御子イエスさまが、叫んで下さったのです。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」

わたしたちが「地獄」と思うような、不安や痛み、言い難い不安と苦痛と恐れにある時、その痛み苦しみの底の底に、十字架のイエスさまが立っておられます。

わたしたちが、どこへ行こうと、それが地獄のようであろうと、陰府であろうと、もはやそこにも、わたしたちの救い主であるイエスさまがおられるのです。

詩編の 139 : 8 にはこうありました。「天に登ろうとも、あなたはそこにいまし／陰府に身を横たえようとも／見よ、あなたはそこにいます。」

もはやこのようなところに、神などいない。希望はない。救いはない。そのような陰府に、身を横たえていた。動けなくなり、倒れていた。

しかし、見よ、そこにもあなたはおられる。そこにも神はおられる。そこにも、イエスさまは、十字架で磔にされ、血を流し、あらゆる不安と苦痛と恐れを、その体と魂に受けて、わたしたちと共に、いや、わたしたちよりも低く深いところに、おられるのです。

<確信と慰め>

もはやわたしたちにとって、神さまがおられないところは、どこにもありません。

もはや、わたしたちは「地獄」を味わうことはない。もはや、絶望はない。

なぜなら、神の御子が、世界中から見捨てられたような、絶望の果てにも、地獄にも、見よ、そこにも、おられるからです。

そして、この方こそ、十字架で死んで葬られた後、三日目に死者の中から復活し、罪と死を打ち破り、すべてに勝利なさったお方なのです。闇を打ち破る力をお持ちの方なのです。光そのものであるお方なのです。

だから、今日の答えにあったように、イエスさまは、ご自分が陰府にくだり、その苦しみを耐え忍んで下さることによって、「地獄のような不安と痛みから、わたしを解放してくださいました」のです。もはや、地獄を、取り除いて下さった。地獄も、陰府も、その救いの光で、照らし出して下さったのです。

そのことが、今を生きているわたしたちの、慰めとなります。

地獄が、神さまから引き離されることであるなら。その地獄から解放される、ということは、神さまに近づけられる、ということです。どのような困難の時にも、神さまの御手がわたしを捕らえていると、そう信じる事が出来る、ということです。

そのことこそが、わたしたちの忍耐する力となり、寄り継る希望となり、人生の支えとなるのです。

わたしたちは、イエスさまの十字架を思うことで、体の痛みが消えたり、悩みごとが思ったように解決したり、問題がなくなったりするわけではないでしょう。

でも、わたしの体も、魂も、存在し、生きているこの毎日も、すでに、すべてイエスさまのものなのです。だから、絶対に神さまの御手から離されることはありません。

わたしたちは、最も激しい試みの時にも、イエスさまが「陰府」にまで降って下さったことを覚えるなら、神さまが共におられる。わたしがキリストのものである。その確信へと導かれていくのです。ますます神さまに、近づけられていくのです。

地獄のような不安と痛みも、イエスさまはわたし以上にご存知であり、そのことに耐え忍ばれ、そして勝利なさいました。わたしは、その方のものなのです。その方のご支配の中にいるのです。神さまの愛と救いのご計画の中に、わたしの魂も、体も、命も、人生も、すべて置かれているのです。そうであるなら、このわたしを、ご自分の恵みのご計画に従って、完成へと導いて下さるのは、神の国へと迎えて下さるのは、神さまご自身に他なりません。

わたしたちを支配しているのは、肉の邪悪な欲望でも、この世の苦しみや悲惨や地獄でもありません。わたしたちの支配者は、わたしたちを愛して下さる、すべてに勝利なさいましたイエスさまなのです。

だから、わたしたちはこの方のものとして、この方のために生きているのだと、確信をもって、信じてよいのです。

【お祈り】 天の父なる神さま

あなたの御子イエスさまが、わたしたちのために十字架に架かり、神に見捨てられる地獄のような不安と痛みを味わい、わたしたちの罪の贖いを成し遂げて下さいました。

わたしたちは、イエスさまにあって、罪の支配から解放され、イエスさまのご支配に生きる者とされていること。そして、まことの地獄から解放され、最も激しい試みの時にも、そのような時にこそ、イエスさまが共にいて下さることを味わい知り、神さまに近づけられることを覚えます。

不安や苦痛や恐れは、弱く小さいわたしたちにとっては耐え難く、それらを遠ざけていただきたく、心から願います。しかし、そのような苦しみを覚える時には、その苦しみの只中にこそ、もっとも近くにイエスさまがおられることを、思い起こさせて下さい。

そしてわたしたちは、あなたから引き離されることは決してなく、しっかりと永遠にイエスさまに結ばれて、神の子として受け入れられていることを、ますます確かにさせて下さい。

このイエスさまの十字架による慰めがなければ、確信がなければ、生きることはどれだけ辛く、まさに地獄のようであるかと思えます。一人でも多くの者が、イエスさまの十字架に与り、永遠の命を得られますように。まことの慰めをいただくことが出来ますように。

このお祈りをイエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 5 3 2 「やすかれ、わがこころよ」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 2 7 「父、子、聖霊の」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン